

群 教 セ	E03 - 02
	平 24. 246集

教師・児童・保護者が共通の目的意識をもって 改善を進める学年経営

— 取組の目的と実践の内容・成果が明らかになる
見える化システムの開発と活用を通して —

長期研修員 神保 康紀

《研究の概要》

本研究は、学年目標の達成を図る学年経営において、取組の目的と実践の内容・成果が明らかになるシステムを開発し、教師・児童・保護者が共通の目的意識をもって改善を進められるようにすることをねらったものである。児童実態分析シートや実行策考案シートで、学校評価結果や児童の実態から課題を明らかにし、学校を取り巻く内外環境や児童の強みを生かした実践計画を立てた。また、カードや懇談会を工夫し、実践の内容・成果の見える化を図った。

キーワード 【学年経営 学年目標 見える化 目的意識 学校評価】

I 主題設定の理由

小学校学習指導要領解説総則編第3章第5節3には、学級担任の教師について、「他の教師の助言や協力を得て、指導技術の向上、指導方法や指導体制などの工夫改善を図り、日ごろの学習指導を一層充実させることが大切」とある。また、平成22年に群馬県教育委員会では、指導資料「学級経営の充実に向けて」の中で、「学校の教育目標の基本方針に沿った学年目標や学級目標をたて、教職員が共通のめあてをもって、子どもたちが毎日生き生きと自己を高め、生活できるように支援しましょう」と提言している。学年目標達成のために、学年主任を中心として教師が意識をそろえて協力し、組織的な取組を行うことが求められている。

学年経営でもう一つ大切なことは、保護者との連携・協力である。平成19年に国立教育政策研究所が行った「家庭の教育力再生に関する調査研究」では、「最近家庭の教育力が低下しているのではないか」という意見に対し、「全くそのとおりだと思う」と答えた人が37%、「ある程度そう思う」と答えた人が45%という結果であり、8割を超える親が「家庭の教育力が低下している」と回答している。教育基本法第13条には、学校と家庭の連携について、「教育におけるそれぞれの役割と責任を自覚するとともに、相互の連携及び協力を努める」べきことが規定されている。学校は、学校の取組の目的や内容・成果を積極的に保護者に伝え、学校評価により定期的に評価を行ったり意見を聞いたりして、家庭と意識をそろえ共に児童を育てていかなければならない。しかし、現状では、学校から様々な手段で家庭に教育活動を伝えているが、一方通行になりがちであり、保護者の理解や協力を十分得て連携を図る手段を見直し工夫する必要がある。

これらのことから、学年経営において、学年主任を中心に改善のための計画を立てて実践する組織的な取組を行うために、課題や改善のための実践の内容・成果について、児童自身や保護者の理解を図るようになることが必要だと考えた。そこで、取組の目的と実践の内容や成果が明らかになる見える化システムを開発し、活用することを通して、教師・児童・保護者が共通の目的意識をもって改善を進めることができるようにしたいと考え、本主題を設定した。

II 研究のねらい

学年目標の達成を図る学年経営において、教師・児童・保護者が共通の目的意識をもって改善を進めるために、取組の目的と実践の内容・成果が明らかになる見える化システムを開発し活用することが有効であることを明らかにする。

Ⅲ 研究の見通し

- 1 学年目標実現に向けた話し合いにおいて、児童の実態や学校の環境要因を分析するシートを基に、課題を明らかにし改善のための実行策を検討すれば、学校を取り巻く内外環境や児童の強みを生かした改善の方向性を定めることができるであろう。
- 2 実践計画の立案において、実践を具体化するシートを基に、児童の主体的な活動を促す指導の工夫を行えば、課題や実践の意味を理解し、改善に向けて意識や実践力が高まるであろう。
- 3 計画の実践において、学習・生活がんばりカードや懇談会の工夫によって、課題改善の取組の目的や実践の内容・成果を理解できるようにすれば、保護者が改善に向けて意識を高め主体的な協力をすることができるであろう。

Ⅳ 研究の内容

1 基本的な考え方

教師・児童・保護者が共通の目的意識をもって改善を進める学年経営とは、教師はもとより、児童自身と保護者も、課題改善の取組の目的と実践の内容・成果を共通理解することで、三者が同じ方向を向いて学年目標の達成を図る取組である。

教師は、学年主任を中心に、学校環境要因や児童の実態を分析し、課題を明らかにする。分析した結果から得られた、学校を取り巻く内外環境や児童の強みを生かし、学年として課題改善のための具体的な目標と指導計画を立てて実践を行う。

児童には、課題に対する具体的なめあてをもたせ、何をすればいいのかが明らかになるような指導の工夫を行う。学習・生活がんばりカードによって学習の振り返りを行い、家でも保護者と話をする機会をつくる。学んだことを伝えることにより、課題の改善に向けて、児童の意識や実践力が高まると考えた。

保護者には、学年便りや授業公開日を利用して取組について伝え、家庭でのかかわり方を示す。学習・生活がんばりカードを基に、児童に働きかけたり、学校に意見を伝えたりできるようにする。学級懇談会では、取組について話し合う場を設けて、児童への働きかけやかかわり方を見直す機会をつくる。これらのことにより、課題の改善に向けて、保護者の意識を高め、主体的な協力を図れるようにする。

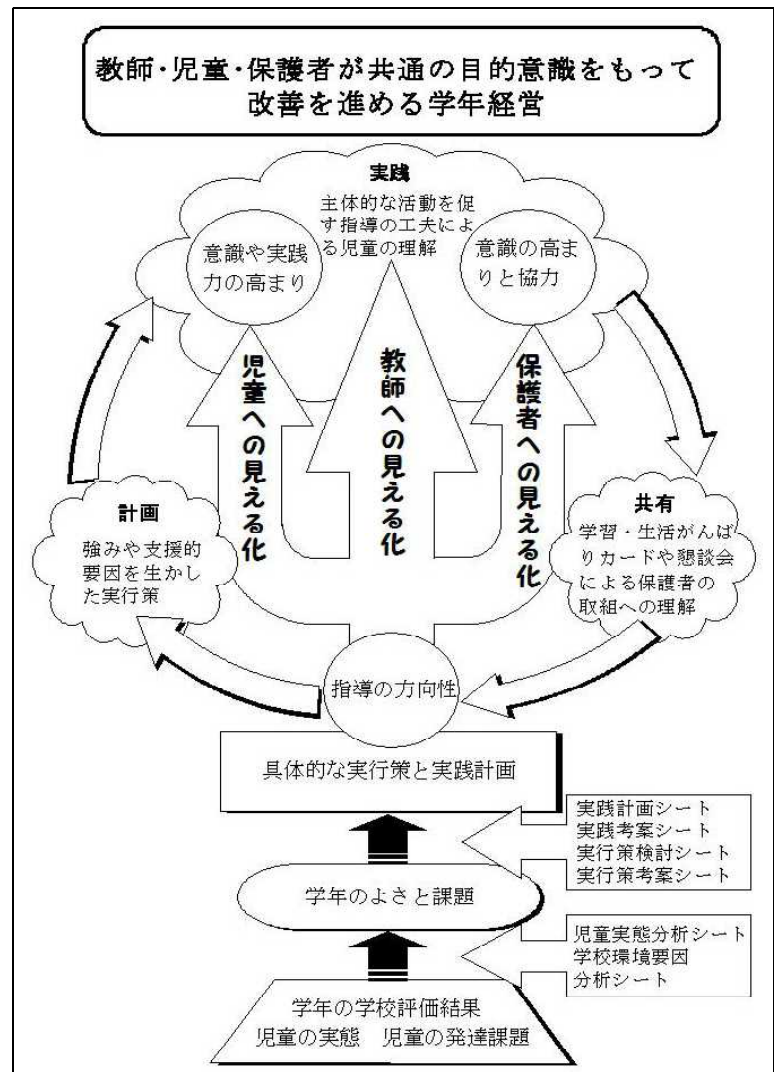


図1 研究構想図

学級懇談会では、取組について話し合う場を設けて、児童への働きかけやかかわり方を見直す機会をつくる。これらのことにより、課題の改善に向けて、保護者の意識を高め、主体的な協力を図れるようにする。

2 教材の概要

(1) 見える化システムとは

教師・児童・保護者に対し、課題改善の取組の目的と実践の内容・成果の見える化を図るシステムの総称である(図2)。課題把握のための分析を学年主任が行い、学年会において実行策の検討を行う。実践計画は、学年で分担して立案し、実践化を図る。この一連の流れを円滑に進めるために、六枚のシートと学習・生活がんばりカードで構成した。

(2) 見える化システムの流れ

① 学年主任が行う学校環境

要因分析と児童実態分析

学校環境要因分析シートは、学校の外部環境要因と内部環境要因を分析するものである(図3)。外部環境要因は、「家庭」「地域と地域住民」「地域の自然」について、それぞれ支援的要因と阻害的要因を分析する。内部環境要因は、「人的」「物的」「情報的」に分類して、それぞれ強みと弱みを分析する。このシートを年度当初に作成し、定期的に見直して付け足しを行っていくことで、学年の課題改善を図るヒントを得られるようにする。

児童実態分析シートでは、学校評価結果とそれにかかわる児童の実態を分析する(図4)。学校評価結果の低い評価項目から弱みを分析し、課題を明らかにする。高い評価項目から児童の強みを分析し、課題改善の実行策を考える。

この二枚のシートによる分析を学年主任があらかじめ

めり学年会に提案することで、課題に対する具体案づくりを円滑に進めることができると考える。

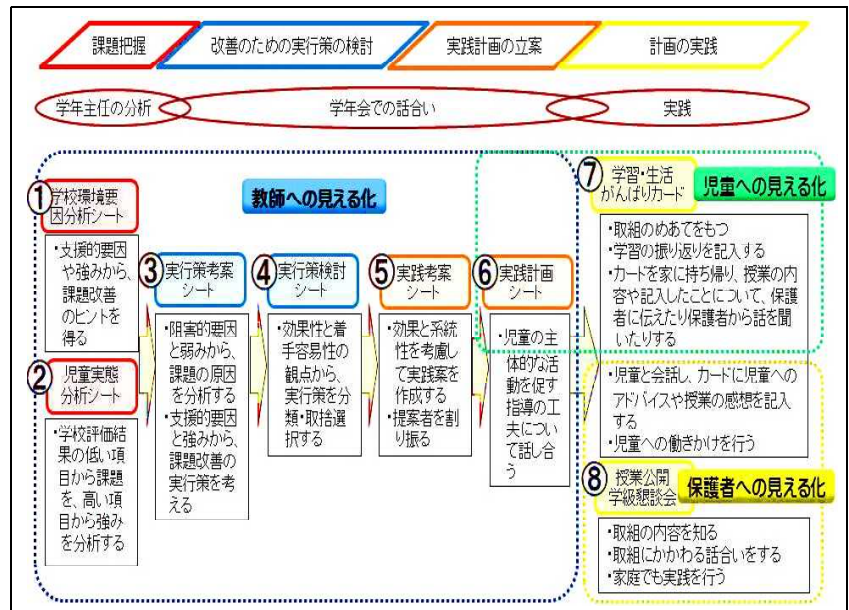


図2 見える化システムの流れ

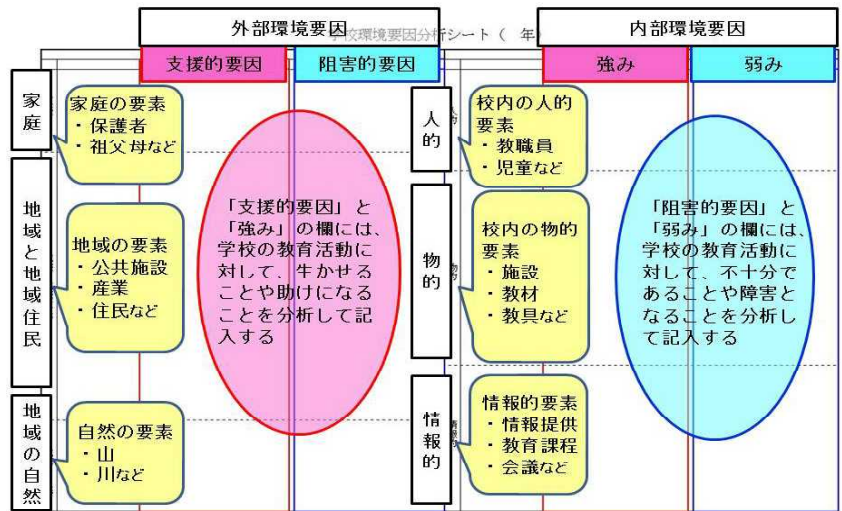


図3 学校環境要因分析シート

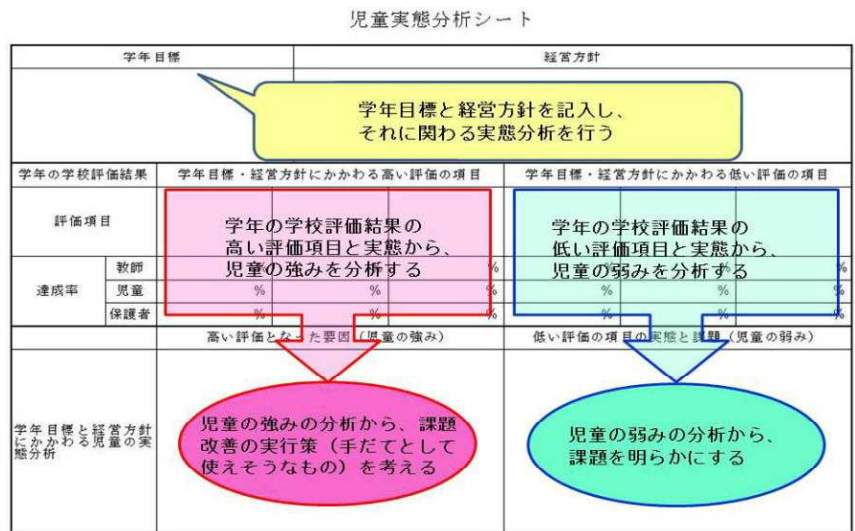


図4 児童実態分析シート

② 学年会での分析

ア 実行策の考案と検討

学校外部環境の阻害的要因と内部環境の弱みから、課題の原因を探る。そして、学校外部環境の支援的要因と内部環境の強みから、課題改善の実行策を考える。課題の原因を踏まえた改善の実行策を多面的に考えられるようにする（図5）。

実行策は、効果性と着手容易性の観点から分類し、取捨選択を行う（図6）。シートの左上に分類された、効果が高く着手もそれほど困難ではないと思われる実行策から、課題改善の計画を立案する。

イ 実践計画の立案

実践考案シートに課題改善の重点目標を記入する（図7左）。学年主任が実践の効果と系統性を考慮して実践案を作成し、学年会に提案する。実践の詳細な計画は、教師の個性や経験等によって提案者を分担する。これにより、学年教師一人一人が主体的に取組にかかわる体制づくりを行う。

各提案者は、実践計画シートを使って実践の詳細な計画を立て、学年会に提案する（図7右）。

学年会では、本時のポイントとなる部分の発問や学習形態、進め方の工夫などについて話し合いを行う。また、実践や事前・事後活動にかかわって、保護者が児童に働きかけられるようにするためにはどのようにしたらよいかについても検討し、必要に応じて計画の修正や再提案を行う。これらのことにより、児童にも保護者にも取組の目的や内容、成果が分かり、意識や実践力を高めることができると考えた。

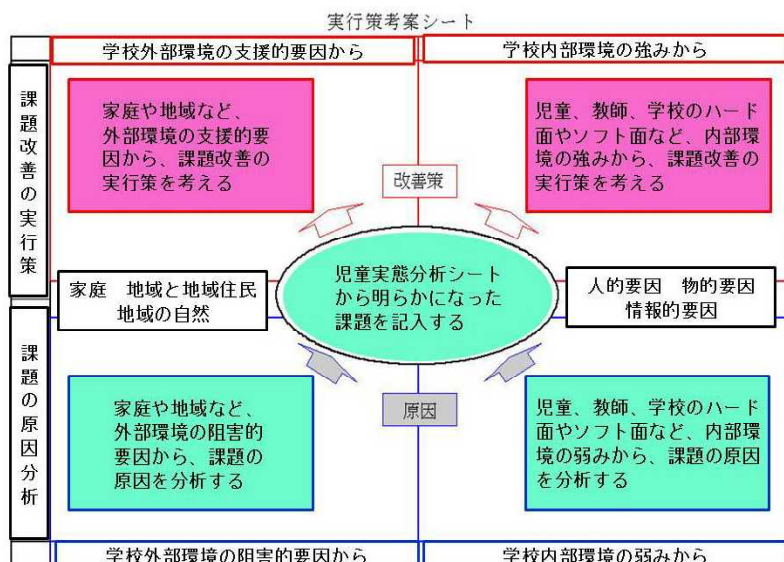


図5 実行策考案シート

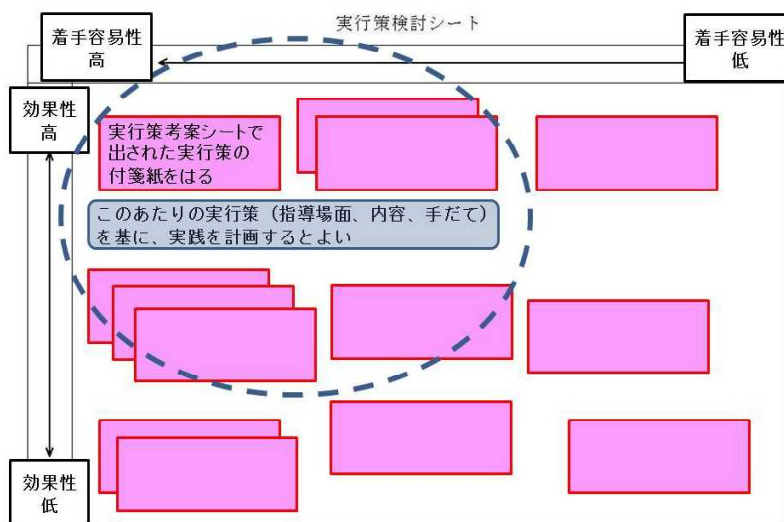


図6 実行策検討シート

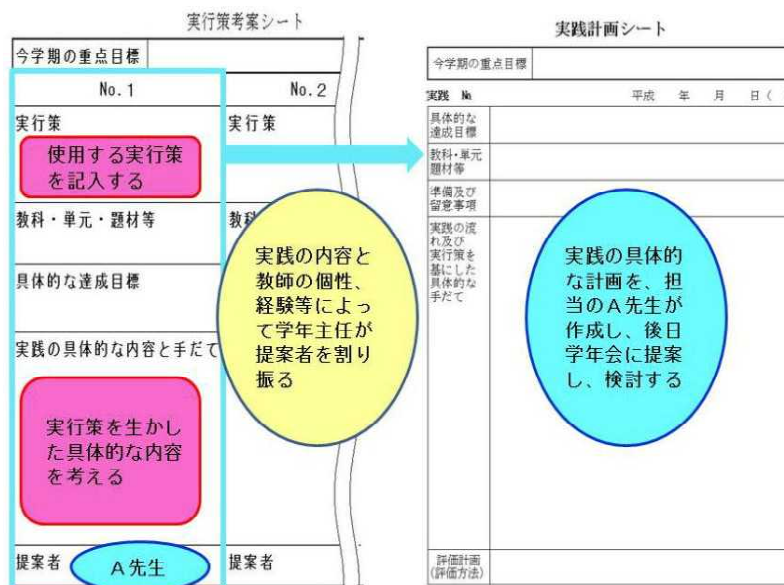


図7 実践考案シート（左）から実践計画シート（右）へ

③ 保護者の理解を深める記録

学習・生活がんばりカードには、教師からの課題提示を受けて学級で話し合った重点目標を、児童が記入する(図8)。「今日の授業の内容」には、実践の概要が保護者に伝わるよう、あらかじめ授業のねらいや大まかな内容・流れを記入する。また、児童は、授業で分かったことや考えたことなど、振り返りを記入する。児童が持ち帰ったカードを基に保護者に話をする機会を設ける工夫をすることによって、実践の目的

や内容・成果について、児童の言葉で保護者に伝える。保護者は、学校からの連絡だけでなく、児童から直接話を聞くことにより、学校の取組への理解が深まり、それに沿って児童に働きかけようとする意識が高まると考えた。

学習・生活がんばりカード

めあて 重点目標を、児童が自分の言葉で記入する

◎ きょうのべんぎょうで、がんばったことや思ったことなどを書きましょう。また、おうちの人にもお話ししましょう。

◎今日の授業の内容	◎きょうのべんぎょうについて	◎おうちのりから
<p>◎ねらい</p> <p>◎内容</p> <div style="border: 1px solid black; border-radius: 10px; width: 80px; margin: 10px auto; text-align: center;">教師が記入</div> <p>実践の概要が保護者に分かるような説明</p>	<p>実践終了後、児童はカードを家に持ち帰り、授業の内容や記入したことなどについて、保護者に説明する</p> <div style="border: 1px solid black; border-radius: 10px; width: 80px; margin: 10px auto; text-align: center;">児童が記入</div> <p>分かったことや思ったこと、これから頑張ろうと思うことなど</p>	<div style="border: 1px solid black; border-radius: 10px; width: 80px; margin: 10px auto; text-align: center;">保護者が記入</div> <p>児童へのアドバイスや働きかけ、授業の感想など</p>

図8 学習・生活がんばりカード

V 研究の計画と方法

1 実践計画

対 象	研究協力校 小学校第2学年4学級の担任、児童、保護者
実践期間	平成24年8月8日～11月14日

2 検証計画

検証項目	検証の観点	検証方法
見通し1	学年目標実現に向けた話し合いにおいて、児童の実態や学校の環境要因を分析するシートを基に、課題を明らかにし改善のための実行策を検討したことは、学校を取り巻く内外環境や児童の強みを生かした改善の方向性を定めることに有効であったか。	<ul style="list-style-type: none"> ○学年会議で出された意見 ・学校環境要因分析シート ・児童実態分析シート ・実行策考案シート ・実行策検討シート
見通し2	実践計画の立案において、実践を具体化するシートを基に、児童の主体的な活動を促す指導の工夫を行ったことは、課題や実践の意味を理解し、改善に向けて意識や実践力が高まることに有効であったか。	<ul style="list-style-type: none"> ○実践での児童の発言、記録、行動 ・学年会議で出された意見 ・実践考案シート ・実践計画シート
見通し3	計画の実践において、学習・生活がんばりカードや懇談会の工夫によって、課題改善の取組の目的や実践の内容・成果を理解できるようにしたことは、保護者が改善に向けて意識を高め主体的な協力することに有効であったか。	<ul style="list-style-type: none"> ○学習・生活がんばりカード ○学級懇談会で出された意見 ・学年会議で出された意見

VI 研究の結果と考察

1 学年目標実現に向けた話し合いにおいて、児童の実態や学校の環境要因を分析するシートを基に、課題を明らかにし改善のための実行策を検討したことは、内部環境の強みや外部環境の支援的要因を生かした改善の方向性を定めることに有効であったか。

(1) 実践の概要

① 児童実態分析シートで課題と児童の強みを分析する

1学期末の学年の学校評価結果から、児童の実態分析を行った。評価の低かった項目は、「相手

の立場に立って考える」等の四項目。児童は、遊びや生活の中で自分のことを優先してしまい、相手のことを考えられない場面が見られることがある。学年目標「友達に優しくだれとでも仲良くしよう」の達成に向けて、二学期の重点目標を「相手の気持ちを考えることができるようにする」とした。評価の高かった項目は、「健康で体力のある体をつくろうとする児童が育っている」等の三項目。外で体を動かすことが好きで、明るく元気で活動的な児童が多い。そこで、課題改善のための実行策を検討した結果、体を動かす楽しい体験的な活動を取り入れた。

② 学校環境要因分析シートによる分析結果から、改善の方向性を探る

外部環境の阻害的要因からは、「学校の教育活動が十分伝わっていない」こと、支援的要因からは、「保護者が協力的である」こと、内部環境の強みからは、「校内研修で、児童は学び合いのやり方を学習している」「毎月二回の学校公開日が利用できる」などが明らかになった。「相手の気持ちを考えることができるようにする」という課題に対して、学校の取組を保護者に伝え、家庭と協力して改善を図る必要があるということや、道徳で心を育てることなどを話し合った。そこで、実行策として、「学校の取組を伝え、意見を集める」「学年通信に保護者の意見も取り入れていく」「道徳の授業を充実させる」「グループ学習やペア学習など、学習形態を工夫する」を分析した。

③ 実行策考案シートで課題の原因を分析し、改善のための実行策を考案する

課題（児童の弱み）を改善するために、児童実態分析シートと学校環境要因分析シートの分析結果から、課題の原因と改善のための実行策を考えた。一人一人が考えたことは、付せん紙に書いて実行策考案シートにはり、内容を説明しながら似ている実行策については一か所にまとめた。

内部環境の強みからは、たくさんの実行策が考え出された。その中で、実行策は、課題となっている力を育てるための「学校生活の場面」「学習の内容」「手だて」という観点で分類できることが分かり、具体的な実践計画を立てる際のよりどころとした。

④ 実行策検討シートで実行策の取捨選択を行う

実行策の効果性と着手容易性について検討を行った。『相手の気持ちを考える』という心を育てることが課題なので、一度や二度の授業で簡単に改善できることではない。「着手が容易で効果も高い実行策は、なかなかない」ということが確認された。しかし、「人間関係づくりのための楽しい活動」「よさを認めたり生かしたりする活動」「道徳の授業の充実」「人間関係づくりのためのスキル」の四つは、課題改善のために比較的効果が高く着手も容易であると考えられるので、実践に取り入れるという取捨選択を行った。

⑤ 実行策から実践内容を決める

課題改善のための実践について、学年主任から、生活科・学活・道徳・図工などが提案された。それを基に、実践考案シートに三つの実践を計画した（表1）。

表1 決まった実践と話し合われた内容

No.	教科・題材	学年会で話し合われた内容
実践1	学活（学校公開日） 「友だちをさそおう」 （ソーシャルスキル トレーニング）	<ul style="list-style-type: none"> 取組全体に対して、児童が明確な課題意識をもてるようにするために、「相手の気持ちを考えること」について実態調査を行う。その結果、「友だちのことをよく見て気もちを考えよう」という共通のめあてを立てた。 この題材は、一人での友達に、自分から声をかけて誘うことができる児童が少ないという実態に合った内容である。 ソーシャルスキルは、授業時間だけで身に付くものではないので、早めに実施し、事後活動をしっかり行う必要がある。 詳細な実践計画は、ソーシャルスキルトレーニングを行った経験がある教諭が立てる。
実践2	道徳（学校公開日） 題材は未定（信頼・友情 または思いやり・親切の 価値項目で）	<ul style="list-style-type: none"> スキルだけでなく、やはり心を育てることも大切である。 次の人権週間の取組につながる。 詳細な実践計画は、道徳指導の経験が豊富な学年主任が助言を行いながら、教職経験3年目の教諭が立てる。
実践3	学活（授業参観日） 「ことばのプレゼント」 （構成的グループ エンカウンター）	<ul style="list-style-type: none"> よさを認めたり生かしたりする活動という実行策を具体的に展開できる。 同じような実践を行ったことがあり、効果が上がった。 温かい人間関係をつくる内容なので、保護者に見てもらおう授業としてもちようどよい。 詳細な実践計画は、学年主任が以前行った授業を基に、全員で考える。

実践考案シートを使って具体的な実践の形をつくっていったことにより、それまでの話合いで明らかになった実態・課題・実行策などの要素が整理・統合された。また、実践1～3で、段階を踏んで課題改善を進めていくことなど、取組全体の流れにも留意した計画を立てた。

(2) 結果と考察

児童実態分析シートから、学年として「相手の気持ちを考える心を育てる」ということに対して、何を重点に改善していくかについて話し合うことができた。児童のよさの分析から、体験的な活動が実行策として有効であることを、学校環境要因分析シートから、学校だけの取組をするのではなく家庭と連携を図ること、教師の個性や校内研修の成果を生かせることを確認した。その結果、実行策考案シートには、ソーシャルスキルトレーニングの導入や少人数グループによる学び合いなど、幅広く改善の方向性を出し合うことができた。学年会で課題改善の実行策を検討し具体的な実践を計画していく中で、保護者参加型の授業参観を取り入れることや、人間関係をつくるスキルを身に付けさせつつ道徳で心情面も育てることなど、課題改善に向けて様々な考え方が出され、活発な話合いが行われた。一人一人の教師が様々な考えに触れ、学年として課題改善の方向性を絞っていくことができた。

実践後の学年教師の振り返りからも、「自分のクラスと他のクラスの実態や課題を比べ、自分の学級に足りないものを考えることができた」「実態を分析して課題や実行策を考え実践計画を立てるといふ部分が、普段の学年会ではなかなかできていなかったが、これをしっかり行ったので、どの実践も目的をはっきりもって行うことができた」というものがあった。

以上のことから、各シートによって課題を明らかにし改善のための実行策を検討したことは、学校を取り巻く内外環境や児童の強みを生かした改善の方向性を定めることに有効であったと考える。

2 実践計画の立案において、実践を具体化するシートを基に、児童の主体的な活動を促す指導の工夫を行ったことは、課題や実践の意味を理解し、改善に向けて意識や実践力を高めることに有効であったか。

(1) 実践の概要

① 学級活動「友だちをさそおう」で行った指導の工夫

実践計画カード(図9)を使った事前の学年会では、課題意識のもたせ方とスキルの演習について検討を重ねた。課題をつかませる過程では、一人ぼっちで寂しそうにしている「ぐんまの子どものためのルールブック50/だれも仲間はずれにしない」の場面絵を提示することで、児童の視覚に訴えることにした。また、実態調査結果を提示することによって、「友達の様子について気付いて声をかけたり行動したりすることが十分でない」という課題に児童自身が気付けるようにして、「自分から友だちをさそえるようにしよう」というめあてをもたせた。友達の誘い方のスキルは、教師がT.Tによって悪いモデルとよいモデルを実演して見せることによって、児童自身が大事なことに気付けるようにした。そして、四人グループによる演習や条件付きの多人数グループづくりなど、児童が互いにアドバイスをしながら行う学び合いや、楽しみながら体験的にスキルを身に付けられるような工夫を取り入れることが決まった。

今学期の重点目標		相手の気持ちを考えることができる	
実践 No. 1		平成24年10月15日(月)	
具体的な達成目標	相手の気持ちを考えて色々な友達を仲間に誘うことの大切さを理解し、一緒に遊んだり同じグループになったりするために、友達に自分から声をかけることができる。		
教科・単元 題材等	学活 「友だちをさそおう」		
準備及び 留意事項	場面絵、実態調査結果、チャレンジカード、学習・生活がんばりカード		
実践の流れ 及び 実行策を基 にした具体 的な手だて	<p>授業</p> <p>1 絵を見て、一人ぼっちの子の気持ちを考える。 ・仲間に入らずに一人ぼっちでいる子は、とても寂しい気持ちでいることに気付かせる。 ・児童の実態調査結果を振り振り、自分たちの足りない点に気付く。 本時のめあて 自分から友だちをさそえるようにしよう</p> <p>2 ロールプレイを見て、友達を誘うことの大切さを理解する。 ・一人ぼっちの子を代表の児童が、遊びに誘う子を教師が演じる。 ・誘われた側の気持ちを考え、発表する。演技をした児童も、気持ちを発表する。</p> <p>3 友達の誘い方を考え、スキルを理解する。 ・教師が誘う役になり、モデルを見せる。(誘われる役は、教師または児童) ・悪いモデルとよいモデルを両方見て、どんなことに気を付けたらよいかを考える。 ・誘う時の言葉、声の大きさ、視線、表情、位置などについて ・誘われた側は、どんな反応をするのかよいかも考える。</p> <p>4 スキルの練習をする。 ・まず、隣向きの2人組で2回ずつ練習する。 ・次に、4人組のグループになり、役割を交代しながら練習をする。一人が誘って2人行う。誘う役以外の人は、「近づいて」「笑顔で」「相手を見て」「はっきり」という4つの観点に従って、誘う人のスキルについて一言ずつアドバイスをする。 ・最後に、指定されたグループを誘い合って作る。 5人以上のグループ、男女混合の4人以上のグループなど</p> <p>5 チャレンジ週間の取組について知る。</p> <p>6 授業の振り返りをする(学習・生活がんばりカードの記入)</p>	5 5 10 15 5 5	
	<p>チャレンジ週間</p> <p>・今日から1週間、クラスで取り組む。 ・量体みには、誘い合って指定されたグループを作り、遊ぶ。 例：3人以上の男女混合、他のクラスの人を入れる、好きな人5人以上、10人以上(できるだけ、あまり遊んだことがない人も入れる) ・20分休みは、一人になる子がいないように、自主的に誘い合って遊ぶ。 ・教科等の学習で、グループ作りを行う。できる範囲で取り組む。 ・グループ作りが必要なゲームを行う。【計画を作り、15日からの週予定に入れる】 ・毎日、チャレンジカードに振り返りを記録する。</p>		
評価計画 (評価方法)	<p>・言葉、声、視線、表情、位置などに気を付けて、友達を誘うことができたか。(観察 学習・生活がんばりカード)</p> <p>・友達の気持ちを考え、仲間に誘うことの大切さが分かったか。(発言、学習・生活がんばりカード)</p>		

図9 実践計画カード 学活「友だちをさそおう」

もう一つの工夫としては、児童の実践力を高めるための事後活動として、授業後の一週間を学年でチャレンジ週間として設定し、グループ活動を取り入れた授業や「他のクラスの人も入れた五人以上のグループをつくって遊ぶ」などの遊びを意図的に取り入れた。

(2) 結果と考察

児童は、場面絵とその場面の役割演技に引きつけられ、仲間に入れられない時の一人ぼっこの寂しさやだれかに誘われた時のうれしさについて、具体的な場面を思い浮かべて考えられた。また、クラスの実態調査結果を提示したことから、自分たちの課題であることに気付くことができた。スキルの学習では、友達を誘う教師の表情、話し方、動きなどに着目し、「近くで・目を見て・笑顔で・はっきり」という四つのポイントに気付くことができた。四人グループの演習では、ポイントに基づいた友達の誘い方について助言ができた。自分なりに考えた表現で役割演技に取り組む姿や、振り返りの「きんちょうした」という言葉からは、児童が状況や自分から声をかける意味を十分理解していたことが分かる(図10)。「さそわれたときは、とてもうれしかった」という言葉から、自分が誘われることによって友達を誘うことの大切さを実感し、「おひる休みに、だれかをさそおう」という意欲をもつことができたものとする。

・じぶんからさそったときは、きんちょうしたけど、さそわれたときは、「いっしょにあそぼう」と言ってくれて、うれしかったです。
・さそわれたときは、とてもうれしかったです。今日のおひる休みに、だれかをさそおうという気持ちになりました。

図10 カードに記入された児童の振り返り

相手の気持ちを考えるチャレンジ週間では、体育で指定された人数のグループをつくって運動する場面で、「近くで笑顔で目を見てはっきり」を意識した誘い方でグループづくりをする姿が見られた。休み時間には、いつもは仲のいい子としか遊ばない児童が色々な友達を誘っている様子、みんなで誘い合って学級の児童全員が外に遊びに行く様子などが数多く見られた。実践後の学年会では、「一週間、意識が低下することもなく、ずっと意欲的に友達を誘い合っていた。子どもたちは、生き生きして楽しそうだった」「一人で行動することが多い女の子が男の子に誘われて遊び、そのことをうれしそうに話してくれた。日記にも遊んだ話を書いてきた」などの報告があった。児童の交流の幅が広がり、楽しく学校生活を送る姿が非常に多く見られたことが確認できた。

以上のことから、実践を具体化するシートを基に学年で実践計画を立て、役割演技によるスキル学習やチャレンジ週間の設定等、児童の主体的な活動を促す指導の工夫を行ったことは、課題や実践の意味を理解し、改善に向けて意識や実践力を高めることに有効だったと考える。

3 計画の実践において、学習・生活がんばりカードや懇談会の工夫によって、課題改善の取組の目的や実践の内容・成果を理解できるようにしたことは、改善に向けて保護者の意識を高め主体的な協力を促すことに有効であったか。

(1) 実践の概要

① 保護者への伝達方法の工夫

実践の目標と目標設定の理由、取組の期間や、学習・生活がんばりカードへの協力、授業を学校公開日や授業参観日に行うことについて、学年便りで周知を図った。実践後にも、学年便りで、授業の内容や児童の反応、学習・生活がんばりカードに記入された保護者の声などを紹介した。また、更に細かな児童の変化の様子については、各学級の学級便りで伝えた。

② 学習・生活がんばりカードの工夫

学習・生活がんばりカードは、それぞれの実践で、児童が振り返りを記入して家に持ち帰り、保護者と話をする活動を行った。保護者は、児童と話したことや児童へのアドバイス、授業の感想などを書いて、家庭での取組を学校に知らせた。

③ 学級懇談会の工夫と家庭での実践

授業参観で実践計画に基づいた授業を実施し、学級懇談会では授業で見られた児童の姿から教師

が読み取ったことについて話した。実践3の学活「ことばのプレゼント」では、保護者が児童に向けて言葉のプレゼントカードを書き、どんな言葉のプレゼントを贈るかやそのわけなどについて、少人数グループで紹介し合う活動を行った(図11)。

学級懇談会后に、家庭でも保護者が児童に言葉のプレゼントを実践し、カードを渡す時の様子や話したことなどについて、保護者が学習・生活がんばりカードに記入した(図12)。

(2) 結果と考察

実践1の学活「友だちをさそおう」では、多くの児童が、「友だちがつまらなそうにしていたら、いっしょにあそぼうと言ってみたいです」という内容の振り返りを学習・生活がんばりカードに書いていた(図12)。これに対して、保護者は、どんな時に友達に誘ってもらいたいかを尋ねたり、誘って仲間に入らなかったとしても相手のためになっていることを話したりした。これは、保護者が、授業の内容や振り返りについて児童の話聞いたことから、相手の立場に立つことの意味をより深く考えさせたいという思いをもち、行われた働きかけだと考える。担任からは、「学習・生活がんばりカードに、保護者から子どもに対してよいアドバイスがあり、大変効果的だった。保護者はこの取組や授業に対してとても好意的だった。保護者の意識の変化が感じられた」という意見があった。

実践3の学活「ことばのプレゼント」後の学級懇談会では、二学期の重点目標「相手の気持ちを考える」の取組について、具体的な児童の姿や学年教師が感じ取った変容などの成果を説明した。保護者は、授業で児童が友達のよいところを探し、よさを認め合って喜ぶ様子を参観したので、授業のねらいと家庭での働きかけ方が分かった。これまでは欠点に目が向きがちで、我が子のよさについて考えることが少なかったことに気づき、かかわり方を見直すことができた。懇談会でよいところを認める大切さや難しさについて話し合ったことが、児童へのかかわり方について見直すよい機会になったと話していた。

家庭での実践では、「ことばのプレゼント」の学習・生活がんばりカードに、図13下線にあるような「欠点を批判することより、長所を言葉に出して伝えることが大切だ」という記述が多く見られた。

具体的な達成目標	友達に言葉のプレゼントをすることにより、互いのよさを認め、誰とでも仲良くしようとする態度を育てる。
教科・単元・題材等	学活 「ことばのプレゼント」
準備及び留意事項	人気アニメの登場人物の絵(人物A、人物B) プレゼントカード2種類(児童が書くカードと教師から渡すカード) 振り返りのワークシート
実践の流れ及び実行策を基にした具体的な手立て	<ol style="list-style-type: none"> 1 アニメの登場人物のよいところを考える。 ○それぞれの人物のよさを確認することで、学習の方向付けをする。 ○よいところ探しのヒントとなるように、よいところを考える。 ・人物A…やさしい 人物B…力持ち、声が大きい 2 5人グループになり、友達に「ことばのプレゼント」カードを書く。 ○机をグループごとにすることにより、相手を見て考えられるようにしたり、友達と相談しやすくなりたりする。 ○1番の児童に対して、他の4人がよいところを相談してカードに書く。その後、2番、3番…と順番に書く。書かれている児童は、次の友達のカードを書く。 ○なかなか書けない児童には、友達の普段の様子を伝える。 3 「ことばのプレゼント」を聞き、その人は誰かを考え、プリントに答えを書く。 ○1班から順番に黒板の前に出て立つ。 ○教師が前に出た児童のカードを読み、だれのことか考えて答えを書く。 ○グループごとに前に出て発表することにより、他のグループの友達のよさに気付かせる。 4 「ことばのプレゼント」カードを班ごとに友達に渡す。 ○各班一斉に、1番の児童から渡す。 ○カードを渡す時は、グループの4人が書かれていることを読み、賞状のようにして渡すことで、プレゼントをもらったという実感をもたせる。 5 教師の言葉のプレゼントカードをもらう。 ○児童のよいところを認めるカードを準備しておき、一人一人に言葉をかけながら渡す。 6 友達のよいところを見つけて思ったことや、「ことばのプレゼント」をもらって思ったことについて書く。 ○感想を書くことにより、友達のよさや自分のよさを確かめる。 ○友達のよさに気づき、これからも見つけて仲良くしていこうとする感想を聞くことにより、実践意欲がもてるようにする。
評価計画(評価方法)	・友達のよいところを認め、仲良くしていこうとする意欲をもてたか(「ことばのプレゼント」カード、振り返りのワークシート)

図11 実践計画カード 学活「ことばのプレゼント」

○きょうのべんきょうについて ・さそった時やさそわれた時の気もちはどうでしたか。	○おうちのりから (児童へのアドバイスや、授業について感じたことを書いてください。)
きょう、みんなでグループをつくり ました。つぎに友だちがつまらなそう にしていたら、いっしょにあそぼうと 言ってみたくです。きょうは、となり の友達の子と前の子とやりました。とてもべ んきょうになりました。またやってみ たいです。それに、さそわれると、と てもいい気もちになりました。ほんば んもやってみたくです。	自分が友達から誘われると「いい気持ち」 になるということから、友達も自分が誘う ことによって「いい気持ち」になると気が 付いたことが良かったと思います。 また、私が息子にこんな質問をしてみました。 「どんな時に友達に誘ってもらいた いか？」 答えは、「みんなと遊びたいけれど、誰 からも誘われずに、仲間に入りたくないあ と思っている時。」でした。 そこで、 「みんなと遊ぶ時は、他に一人でつまら なそうにしている子や、遊びたそうにしてい る子に声をかけてみよう。たとえその子 が、その時に仲間に入らなかったとしても、声 をかけられたことは、きつううれしいはず だよ。」 と話しました。

図12 学活「友だちをさそおう」のカード記入例

・カードを読むと、照れているようで笑っていました。メッセージを考えているうちに、日常の生活の中で子どもに助けられていることがたくさんあるんだなあと思改めて感じました。欠点を批判することより、長所を言葉に出して伝えることが大切だと思いました。

図13 家庭での実践の様子

授業でねらった「互いのよさを認める」ことの大切さが保護者に伝わったことが分かる。一枚だけでなく、家族一人一人からのメッセージを伝えたという保護者もいて、保護者が授業やこの活動の目的を理解し、児童に積極的に働きかけようとする意識が高まったことが分かる。

以上のことから、学習・生活がんばりカードや懇談会の工夫によって、課題改善の取組の目的や実践の内容・成果を理解できるようにしたことは、改善に向けて保護者の意識を高め主体的な協力を促すことに有効だったと考える。

Ⅶ 研究のまとめ

1 成果

- 学年主任は、児童実態分析シートと学校環境要因分析シートによって、学年の実態と課題、改善の方向性を明確にとらえることができた。具体的には、年度当初に立てた学年目標や学年経営方針に照らした達成度を学年教師全員で確認し合い、重点的に改善に取り組まなければならない課題を再確認することができた。また、学校や家庭の強みや支援的要因が明らかになり、教師の得意分野を生かしたり保護者との連携を図ったりするなど、幅広く改善の方向性を出すことができた。
- 学年教師は、実行策考案シートと実行策検討シートによって、児童の力を育てる場や指導の内容、手だてなど、課題改善の実行策について話し合ったことにより、課題改善の方向性を絞っていくことができた。児童の実態や指導方法、保護者との連携などについて、様々な考えや経験を出し合い、学年として課題改善に向けた共通認識を深めることができた。
- 児童には、実践考案シートや実践計画カードを基に、課題のもたせ方や教材、手だてなどを工夫したことにより、明確な課題意識をもたせ、改善への意識を高め実践力を身に付けさせることができた。重点目標に向かって、三つの実践を一連の流れととらえ計画を立てたことが効果的だった。
- 保護者には、取組の目的や内容・成果について、学習・生活がんばりカードや学級懇談会、授業公開、学年便り、学級便りなど様々な手段で伝えたこと、児童と保護者が話をする機会を設けたことにより、学校と同じ方向で児童に働きかけようとする保護者の意識を高めることができた。学習・生活がんばりカードに書かれた保護者のコメントは、詳しくていいいで、取組に肯定的・協力的なものがとても多く、学校と連携・協力する関係をつくれた。
- 学年経営に見える化システムを取り入れたことによって、学年目標の達成に向けて、教師・児童・保護者の課題改善への意識が高まった。そのため、三者がそれぞれの立場で、目的をもって継続的に改善を進めることができた。

2 課題

- 学年の実態を明らかにして課題改善の目標、方針を立てることは、学年経営の基盤となる。この見える化を必要に応じて行い、児童の変容を把握しながら継続的に実践を行っていくことで、学年目標の達成を図ることができるが、PDCAサイクル化させるには、チェック方法の工夫、適切な目標と課題改善にかかる期間を設定していくことが必要となる。
- 学年の取組の内容について学校全体で共有化を図り、系統的・継続的な改善の取組を計画するなど、学校全体として課題改善を図っていくことが必要である。

<参考文献>

- ・永岡 順 奥田 眞丈 編 『学級・学年経営』 ぎょうせい(1995)
- ・高階 玲治 編集 『学校経営相談12ヵ月 第6巻 学年・学級経営』 教育開発研究所(2002)
- ・葉養 正明 編集 『学校を活性化する組織マネジメント』 教育開発研究所(2004)